

獣医解剖学用語第6版 正誤表

用語	注釈(誤)	注釈(正)
皮筋	(127) これらは、ヒトの M. epicranius (頭蓋表筋) の部分を示す。	(126) この皮筋リストは不完全であり、他の皮筋は局部解剖学的に記載される。
前頭筋	(128) 食肉類では痕跡的で、tendinous intersection () と呼ばれる。	(127) これらは、ヒトの M. epicranius (頭蓋表筋) の部分を示す。
後頭筋	(128) 食肉類では痕跡的で、tendinous intersection () と呼ばれる。	(127) これらは、ヒトの M. epicranius (頭蓋表筋) の部分を示す。
中間腱 (反芻類、ウマ)	(129) これは、ウマの Venter caudalis (後腹) の一部であり、中間腱に付着せず、下顎骨に直接終止する。	(128) 食肉類では痕跡的で、tendinous intersection と呼ばれる。
後頭下頸部	(130) この筋はヒトの M. levator scapulae (肩甲挙筋) と相同である。	(129) これは、ウマの Venter caudalis (後腹) の一部であり、中間腱に付着せず、下顎骨に直接終止する。
鎖骨上腕筋 [三角筋鎖骨部]	(137) これは以前 check ligament (制動靱帯)、すなわち浅指屈筋の Caput radiale (橈骨頭) および深指屈筋腱の Caput tendineum (腱頭) と名付けられていたものである。	(136) 家畜では鎖骨が痕跡にまで退化するので、ヒトの Pars clavicularis m. deltoidei (三角筋鎖骨部)との相同筋は、M. brachiocephalicus (上腕頭筋) に合体する。M. brachiocephalicus の他の部分は、ヒトの M. sternocleidomastoideus (胸鎖乳突筋) と M. trapezius (僧帽筋) の部分に相同である。
頸腹鋸筋		(130) この筋はヒトの M. levator scapulae (肩甲挙筋) と相同である。
脊柱起立筋	(132) この用語はウマにおいて、Fascia thoracolumbalis (胸腰筋膜) のうち、第二より第五胸椎の棘突起から肩甲骨の内側面にのびる、特殊な部分をさしている。Mm. splenius (板状筋)、M. semispinalis capitis (頭半棘筋)、M. serratus dorsalis cranialis (前背鋸筋)、および Lig. supraspinale (棘上靱帯) から Lig. dorsoscapulare (肩甲背靱帯) までの弾性線維が aponeuroses (腱膜) を構成する。	(131) 頭蓋骨のところまで付着する部分を含むので、この名称の方が M. sacrospinalis (仙棘筋) よりも適切である。
肩甲背靱帯	(133) ブタとウマの M. subclavius (鎖骨下筋) は長い間、M. pectoralis profundus (深胸筋) の一部と考えられた。反芻類の第一肋骨軟骨から起こる M. subclavius (鎖骨下筋) を M. pectoralis profundus (深胸筋) の、M. supraspinatus (棘上筋) の上に終止する筋束と混同しないようにしなくてはいけない。	(132) この用語はウマにおいて、Fascia thoracolumbalis (胸腰筋膜) のうち、第二より第五胸椎の棘突起から肩甲骨の内側面にのびる、特殊な部分をさしている。Mm. splenius (板状筋)、M. semispinalis capitis (頭半棘筋)、M. serratus dorsalis cranialis (前背鋸筋)、および Lig. supraspinale (棘上靱帯) から Lig. dorsoscapulare (肩甲背靱帯) までの弾性線維が aponeuroses (腱膜) を構成する。
鎖骨下筋	(134) Mm. intercostales interni (内肋間筋) の椎骨端では、いくつかの筋束が 1 ないしそれ以上の肋骨を横切ってのびる。とくに食肉類の第九～第十一肋骨でよくみられる。	(133) ブタとウマの M. subclavius (鎖骨下筋) は長い間、M. pectoralis profundus (深胸筋) の一部と考えられた。反芻類の第一肋骨軟骨から起こる M. subclavius (鎖骨下筋) を M. pectoralis profundus (深胸筋) の、M. supraspinatus (棘上筋) の上に終止する筋束と混同しないようにしなくてはいけない。
肋下筋	(135) この用語は家畜解剖学者により、inguinal arch (鼠径靱帯)、内腹斜筋の後縁および腹直筋の外側縁でかこまれる、inguinal canal (鼠径管) への腹腔の入口と定義されたもので、人体解剖学とは異なる使い方をしている。	(134) Mm. intercostales interni (内肋間筋) の椎骨端では、いくつかの筋束が 1 ないしそれ以上の肋骨を横切ってのびる。とくに食肉類の第九～第十一肋骨でよくみられる。
深鼠径輪	(136) 家畜では鎖骨が痕跡にまで退化するので、ヒトの Pars clavicularis m. deltoidei (三角筋鎖骨部)との相同筋は、M. brachiocephalicus (上腕頭筋) に合体する。M. brachiocephalicus の他の部分は、ヒトの M. sternocleidomastoideus (胸鎖乳突筋) と M. trapezius	(135) この用語は家畜解剖学者により、inguinal arch (鼠径靱帯)、内腹斜筋の後縁および腹直筋の外側縁でかこまれる、inguinal canal (鼠径管) への腹腔の入口と定義されたもので、人体解剖学とは異なる使い方をしている。

	(僧帽筋) の部分に相同である。	
鎖骨部 [鎖骨上腕筋]	(137) これは以前 check ligament (制動靱帶)、すなわち浅指屈筋の Caput radiale (橈骨頭) および深指屈筋腱の Caput tendineum (腱頭) と名付けられていたものである。	(136) 家畜では鎖骨が痕跡にまで退化するので、ヒトの Pars clavicularis m. deltoidei (三角筋鎖骨部)との相同筋は、M. brachiocephalicus (上腕頭筋) に合体する。M. brachiocephalicus の他の部分は、ヒトの M. sternocleidomastoideus (胸鎖乳突筋) と M. trapezius (僧帽筋) の部分に相同である。
副靱帶	(138) この sleeve (袖) は、Articulatio metacarpophalangea [metatarsophalangea] (中手指 [中足趾] 節関節) の高さで、深指 [趾] 屈筋を取り巻く浅指 [趾] 屈筋腱により作られる。	(137) これは以前 check ligament (制動靱帶)、すなわち浅指屈筋の Caput radiale (橈骨頭) および深指屈筋腱の Caput tendineum (腱頭) と名付けられていたものである。
屈腱袖	(139) 反芻類とウマにおいて、(弹性線維豊富な) 深指 [趾] 屈筋腱の結合組織が中節骨の掌側／底側表面に付着している。これが Vagina synovialis tendinum digitorum manus/pedis (指／趾の腱の滑液鞘) を Bursa podotrochlearis manus/pedis (指／趾の足滑車包) から分離している。	(138) この sleeve (袖) は、Articulatio metacarpophalangea [metatarsophalangea] (中手指 [中足趾] 節関節) の高さで、深指 [趾] 屈筋を取り巻く浅指 [趾] 屈筋腱により作られる。
副靱帶	(138) この sleeve (袖) は、Articulatio metacarpophalangea [metatarsophalangea] (中手指 [中足趾] 節関節) の高さで、深指 [趾] 屈筋を取り巻く浅指 [趾] 屈筋腱により作られる。	(137) これは以前 check ligament (制動靱帶)、すなわち浅指屈筋の Caput radiale (橈骨頭) および深指屈筋腱の Caput tendineum (腱頭) と名付けられていたものである。
横板	(140) これらの筋はネコでは分離しているが、イヌでは一部癒合している。	(139) 反芻類とウマにおいて、(弹性線維豊富な) 深指 [趾] 屈筋腱の結合組織が中節骨の掌側／底側表面に付着している。これが Vagina synovialis tendinum digitorum manus/pedis (指／趾の腱の滑液鞘) を Bursa podotrochlearis manus/pedis (指／趾の足滑車包) から分離している。
長橈側手根伸筋	(141) これは反芻類とウマにおいて、かつて Muscle of Thieresse (総指伸筋尺骨頭) の遺残として存在する。	(140) これらの筋はネコでは分離しているが、イヌでは一部癒合している。
短橈側手根伸筋	(141) これは反芻類とウマにおいて、かつて Muscle of Thieresse (総指伸筋尺骨頭) の遺残として存在する。	(140) これらの筋はネコでは分離しているが、イヌでは一部癒合している。
副頭 (反芻類、ウマ)	(141) これは反芻類とウマにおいて、かつて Muscle of Thieresse (総指伸筋尺骨頭) の遺残として存在する。	(141) これは反芻類とウマにおいて、かつて Muscle of Thieresse (総指伸筋尺骨頭) の遺残として存在する。
副頭 (ウサギ、ヤギ、ウマ)	(142) これは反芻類とウマにおいて、かつて Muscle of Phillips (総指伸筋橈骨頭) と呼ばれていた。	(142) これは反芻類とウマにおいて、かつて Muscle of Phillips (総指伸筋橈骨頭) と呼ばれていた。